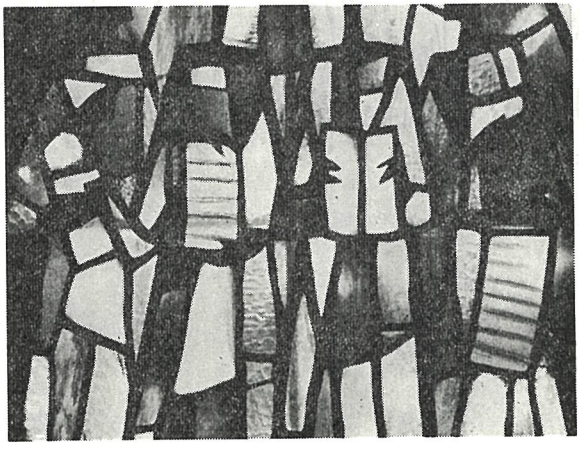
座談会

新島精神と同志社



井上　同志社は、明治八年十一月二十九日午前八時、新島襄先生、山本覚馬、デビス先生と生徒六名が新島先生宅で熱烈な祈禱会をもち、開校式を挙げましたが、本年十一月二十九日をもって百周年を迎えることになりました。『同志社時報』では、その五十六号を創立百周年記念特集号とし、〝新島精神と同志社〟と題する座談会を載せることになりまして、本日ここに六名の先生方にお集まりいただきました。

本年三月に出ました『同志社時報』の第五十四号に〝創立百周年を迎えるにあたっての宣言〟が載せられておりまして、次のように書かれています。

われわれがここに同志社の一〇〇周年を迎えるにあたって、国家百年の大計としての立学の教育理想が、その後の歴史のなかで十分開花するに至らなかった点もあることを、この際謙虚に反省し決意を新たにしなければなりません。このことは一〇〇周年を期して、われわれが同志社創立の理想の原点に帰り、その今日的意義を再吟味することを意味しています。

〝新島精神と同志社〟という題でお話いた

出席者

（ABC順）

香里中高教諭　萩原俊彦
中学校教諭　久永省一
大学文学部教授　北垣宗治
女子大学教授　鴛淵紹子
女子中高教諭　都間和子
高等学校教諭　上田堅一郎
（司会）
大学文学部助教授　井上勝也

だきますことは、いま読み上げましたように、同志社創立の理想の原点に帰り、その今日的意義を再吟味することを意味するものと思います。大学、女子大、岩倉、女子中高、香里、中学からご出席いただきました先生方おのおのの立場から、この問題にたいして忌憚のないご意見をお述べいただきたいと存じます。

それでは、〃新島精神と同志社〃という題でございますので、まず初めに、〃新島精神とは何か〃について各人お話いただき、次に、過去百年間に同志社は新島精神を教学、経営のなかでどのように生かし、どのような人物を養成してきたか、三番目に、現在の状況のもとで、各学校で新島精神の意義をどこに見出し、将来どのように生かされるべきかについて、苦しみと、喜びと、悩みと、希望を卒直にお話いただきたいと存じます。

新島精神とは

それでは、まず〃新島精神とは何か〃という点について、久永先生、どうぞ。

久永　私が同志社中学へ入りましたのは大正の末期です。大学の英文科を出ましてから、同志社中学に戻ってきて、今日まで勤めておりますので半世紀以上同志社にいることになります。この間いろいろ立派な先生から教えをうけたこともあるでしょうが、先生の教えだけでなくて、礼拝とか聖書講義や、いろんなもの、たとえばチャペルのステンドグラスを通して入る光線、あるいは彰栄の鐘、それから若王子の早天祈禱会、そのようないろいろな要素が私のなかにミックスして入ってきて、私をつくってくれているような気がいたします。

私はもともと主観的な人間で、客観的に物事を分析する力がないのですが、私の新島精神というものについて少し語らせていただきます。これを叩き台にして、いかようにもご批判ください。

『同志社時報』の座談会の記事を幾つか読みました。そのなかで、〃同志社精神〃と〃新島精神〃ということばがよく使われているんですね。そして、その二つが同じ意味に使われています。私もこの二つは同じものだと思っています。問題は、〃キリスト教精神〃と〃新島精神〃との関連です。それについては、私のことばに異論がある方があるかもしれま

せんが、私と私の周辺の人々は、このように信じています。

つまり、キリスト教精神と新島精神は合致するということなのです。もちろん新島精神はデモクラシーの精神だといわれる方もありますし、愛と自由と平等の精神だといわれる方もあります。それに附加して、新島先生には、勇気、反骨精神、反官僚主義、そういう要素も含まれているんじゃないかといわれる方もあります。また武士道精神も入っているじゃないかということばも聞きます。そんなふうにいろいろプラス・アルファはあると思うのですが、キリスト教精神が新島精神の根幹をなすものであることはまちがいないと思います。愛や自由や平等というのは、キリスト教精神のなかに包含されていますし、勇気とか反骨精神というのも、力ということばに言いかえますと、イエスの行動のなかにもそれを窺うことはできると思います。イエスは柔和な人であるばかりでなくて、力の人であったと信じます。たとえば、宮殿の屋台店を片っ端から引き倒していかれたあの行動力、それからパリサイ人やサドカイ人にたいして、まむしの子らよと叱咤されたことばなどを思い返してみますと、わざわざ勇気、反骨などということばを借りなくても、キリストの心のなかに、あるいは行動のなかに、それがあると思います。それで、私は新島精神とキリスト教精神は一本でつながると思っています。いま新島精神からキリスト教精神を抜いてしまったら、何が残るかと考えてみたのですが、どうしてもそれが具体的に浮かんできません。ですから、私にとっては、キリスト教精神イコール新島精神イコール同志社精神とまっすぐにつながってしまうのです。

それでは、その中身は何かということなんですが、これまで中学生にずっと長いあいだ説いてまいりましたのは、「愛」と「良心」です。「愛」ということばは、聖書のなかに、「神は愛である」とか、「愛は神から出たものである」とか、充満していると思います。

ところが「良心」のほうは、「テトスへの手紙」のほか、わずか数カ所しかありませんでした。英語のバイブルを調べてみたら、コンシェンス（conscience）になっていましたが、それがほんとうに少ないんです。しかし、これをもう少し広く解釈して、「義」とか「真理」ということばに拡大解釈しますと、それらのことばは至るところにあります。新島先生の「良心」ということばを探してみましたら、例の「良心の充満したるますらお」とか、「一国の良心というべき人物」とか、「良心を手腕に運用する」とか、そういうことばが幾つも見られるのです。だから、新島先生にとっては、「良心」と「愛」とこの二つがいちばん大切なものだと私は思っています。この「愛」と「良心」がキリスト教精神につながる、というのは、この「愛」と「良心」が、私たちが神から授かったいちばん大切な贈り物だと思うからです。

私、四つのころですが、見た夢があります。その夢の中で悪いことをして、目が覚めたら寝汗をかいていた。四つですから、まだ両親からも、誰からも教わっていないのに、

上田堅一郎氏

久永省一氏

こういうことをしたらよいとか悪いとか、善悪を判断する力が私の幼いときにすでにあったというのは、やはり良心は神からいただいたのだと私は思っています。

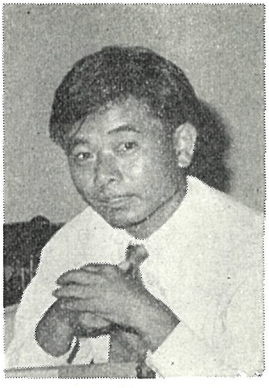
それで、愛と良心を神からいただいている、つまりキリストの心は新島先生の心に合致する、新島精神とキリスト教精神は一致していると私は思うのです。愛のほうは、新島先生のことばに、「人を愛する心は自然に天が人間に賦与せしところなるべし」とありますから、愛と良心はやはり天からいただいたものと思いますし、私の心のなかでは、新島精神とキリスト教精神は密着しているのです。

井上　ありがとうございました。引き続きましてどうぞ。

上田　私も同志社中学に学んで、それから大学を卒業してすぐに同志社高校に勤めたものですから、新島精神ということをいつも聞かされているのですが、それをことばで表現しろといわれると、これだということを一言でいうのはひじょうにむつかしい。それで、まず、新島先生がどうして日本を出られて、どうして同志社を立てられたか、ということを考えてみました。そうすると、新島先生が日本を出られたのは、日本のその当時の現状、すなわちその後進性と欧米列強による侵略の危機を憂うるあまり、日本を救うにはどうすればよいか、外国の事情を見てこなければいけないということで日本を出られた。そして着いた所がアメリカのニューイングランド、そしてその時期は南北戦争の終了直後である。そういうことでピューリタンの精神の最も盛んなところに先生は行かれた、ということを考えてみますと、結局新島先生のいちばんの気持の奥底には、愛国、憂国の情があって、それがアメリカでの生活を通して新島先生の気持のうえに、ピューリタンの精神、キリスト教の精神で仕上げをされた、そういうぐあいに考えることができると思うのです。

それで新島先生は、西欧の文明開花の根底にあるものとして、キリスト教というものを見出された。そして、キリスト教によらなければ日本の国をほんとうに救い得る人物を養成することはできないということで、同志社を建てられたと思うんです。「良心を手腕に運用する人物」ということを新島先生はおっしゃっており、私たちも何度となく聞かされたことばですが、私は新島精神という場合、結局はこの一語につきるのじゃないかと思うのです。その「良心を手腕に運用する人物」を養成するためには、神を信じ、真理を愛し、隣人と和らぐところのキリスト教の道徳によ

良心碑



萩原俊彦氏

らなければできないと、新島先生は確信されたのだと思います。

井上　ありがとうございました。

萩原　私は、大学から大学院と、比較的長いあいだ同志社に学んでおりましたので、同志社の学問や教育のありかたについて、しばしば考えることがありました。また、郷里が群馬県の前橋市であるというような関係で、六歳のころから新島先生について習ってきておるわけです。ですから、理念としての新島精神がこれだと教えられるより前に、先生に関する講話をたくさんきいております。たとえ戦争中でありましても、群馬県の教育会等が紙芝居やサマーブックなどで新島先生を説いており、上州から新田義貞をはじめとする五人の偉人がでた。その一人が新島先生だということを教えていたわけです。また、戦後民主主義の時代には、上州の生んだすぐれたキリスト者として、新島先生を、内村鑑三先生や住谷天来、湯浅治郎、柏木義円の諸先生と比較しながら教えてもらったこともあります。それに、安中市に終戦直後開校した新島学園という学校がありますが、岩井文男学園長が自信をもっていわれることは、この学校は他の私学とちがい広告宣伝料がいらないということです。それは、群馬県教育委員会が新島先生をひじょうに顕彰しているためです。そのためか、新島学園という名称を掲げているだけで、広告宣伝料は不要であり、おのずから良い生徒が集まってくるというのです。

そういう風土で私は育ったわけです。

ところで、少年期にうけた印象としては、「自責のむち」の精神ですね。新島先生が、ご自分の罪を生徒の目前で償われたという行為に、ひじょうに感激いたしました。それから、おじいさんの新島辨治さんがなさった行為です。それは幼少のころの新島先生が何か間違いを犯して叱られたのですが、そのとき、「憎んでは打たぬものなり笹の雪」という俳句を引用されながら、新島先生にいろいろとさとされたという辨治さんの教えを通じて新島先生の何か強い教育精神が芽生えたのじゃないかということです。さらにあげますと、住谷悦治先生がよく語られることですが、松本五平に対する新島先生のあたたかい態度や、学生、生徒を大事に扱えとの遺言です。徹底した平等観と人間尊重の精神がにじんでいる、といったらいいのでしょうか、そういう態度に私はなにかひじょうにひかれるものがあります。私は、新島精神はこれだというように概念を明確にすることはできないのですが、かりに新島精神とは何かと問われると、幼少の頃より教えられてきたこれらの諸点を巧みに抽象化したものではないかと思っております。

ただ、自責のむちについては、いろいろと批判もあるようです。たとえば、あの事件を教室で見ておられた、ラーネッド先生が、ひじょうに不愉快な顔をなされ、後日、同志社校長のとるべき態度としては、いささかどうかとの批判的な見解を寄せられております。また、新島先生をひじょうにすぐれた教育者だと評価されておられました佐々木惣一先生も、あれは美談ではあるけれども、わからな

いとおっしゃられていたとのことです。それに、もしも自分で自分の罪を償おうとするのであれば、自室で自分を責められるべきではなかったのか、なぜ生徒の前でやらねばならなかったのか、というような意見をうかがったこともございます。しかしそれでも、私は自責のむちの美談を無視することは出来ません。とても凡人のなせる技ではないからです。また、これほど強い贖罪愛に富んだ人物と出会ったことがないからでもありましょう。さて、あえて、新島精神を一口で申しますれば、今、上田先生がおっしゃられたように、一つには良心主義でありましょう。良心を手腕に運用するという良心主義であります。それから平民主義、あるいは徹底した平等観、人格主義、人権主義、これが先生の生涯をつ

都間和子氏

らぬく精神ではなかろうかと思うのです。

ついで、キリスト教と新島精神の関係について申します。先生はアンドーバーの神学校で学び、禁欲的な倫理観を身につけられました。もちろん先生は、それ以前に、洋学や、あるいは漢学を学ばれてプロテスタントの倫理観を受容する素地をじゅうぶんにもっていらっしゃったはずです。そのうえで、アンドーバー神学校で受けいれられたもの、それは徹底したピューリタンの精神でしょう。ですから先生は神にいっさいを託し、すべておまかせするという信仰をもたれ、やむにやまれない気持で同志社を設立するということになったのではないかと考えます。

最後に、同志社精神と新島精神という場合、私は久永先生のお考えとはやや異なった見解をもっております。同志社精神の中心をなすものが新島精神であるということについては、どなたも異存がないと思います。ただ、私はそれにプラスして、新島先生の教え子たち、たとえばのちに総長になられた海老名先生や小崎先生、女子部のデントンさんなど同志社教育に尽くした先生がたの教育精神と、それらを真理とうけとめて、世に出て行った卒業生が築きあげた個性的な生き方と思想、たとえば留岡幸助や、山室軍平、鈴木達治らにみられるものなどをも含めて、同志社精神というふうに言えないだろうかと思っております。

井上　ありがとうございました。新島先生の「自責のむち」はニューイングランド神学の統治説を抜きにしては正しく理解できませんね。

都間　私も、自分の頭のなかの新島精神と、同志社のよって立つ精神は、ほとんど同じであるとして、重なっておりますが、だいたい同志社に近いところに長く住んでおりますし、幼稚園にはじまり、女専、大学で同志社教育をうけ、同志社教育にたずさわる道をえらんだのですから、ほんとうは同志社をもっと愛し、新島精神をもっと理解、受容しなければいけませんのに、なにか批判的なものが時として頭をもたげて、なかなか先生のあとにつづくということにはならないわけでございます。でも、私はこういう機会を頂いた事に感謝し、いろんな方がお書きになった先生の伝記を読み、あるいは「同志社大学設立の旨意」というものに戻ったり、先生のお残

しになった遺言、書簡をずっとたどってみたのでございますけれども、そういうなかで、新島精神、あるいは同志社精神というのは何だろうというときに、やはり私も、新島先生の人となり、しかも先生のおことばを借りていうならば、幕末の激動のなかにあって真の人物が少なく、ほんとうに道徳心が衰えている、これは社会の急激な進歩のゆえであるのだけれども……というようなところから、ほんとうに国を憂い、なんとかして救国のため、自分の生涯をかけなければいけないという、切迫した、やむにやまない決意の人として、函館からアメリカにお渡りになり、そこで先生の祈りがかなえられて、お帰りになったときに、先生は、アメリカ、ヨーロッパの社会の底に流れているものが、当時の日本にうけいれられていなかったキリスト教の精神であるということにはっきりとお目覚めになり、そしてこのキリスト教を根底にした人材養成を実現せんとされ、先生は――どこかで私が見たことばですけれども、「キリスト教の愛と自治、平等の精神が音を立てて流れているような学園」、そういうものの建設に生涯をかけようとなさったということ、そしてそれは二百年もかかる大業であるということを先生は見きわめられた上、祈りのうちに大事業に着手なさったということ、そしてそのなかから、ほんとうに良心の全身に充満した人物が後につづく、ということを期待なさっていますが、私はやはりそれがいま先生方のおっしゃったように、新島先生のお考えの中でいちばん大切なことだろうと思います。

北垣宗治氏

そこで、その「良心」とはどういうことなのか、具体的には、何をさすのかをこのあいだからずっと考えて、先生はどういうものを良心とおっしゃったのだろう、そしてそれをいまの社会で私たちはどううけとめればよいのだろうか、具体的にはどう生きることなのかをさぐり、つきとめたいものと考えておりますけれども、まだ考えがつかないでこの席へ出てまいりました。

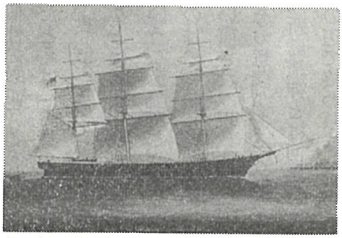
井上　ありがとうございました。北垣先生、いかがですか。

北垣　新島精神ということになりますと、いままで先生方がおっしゃいましたことは、みんな含まれていると思います。新島精神がたいへんあいまいなことばであるというのが、いままで多くいわれてきた不平の一部かと思っております。これをひとつ便利なフォーミュラにすることはできないものかと考えまして、苦しまぎれに出てきた結論は、もし新島襄が一九七五年のこの日に、この場所に生きていたならばどうするであろうかということを考えると、これが新島精神を決める目安かもしれないというふうにいちおうの結論を得ました。これはまことに杜撰な結論ですけれども、そうなると、新島襄とは何者であったかということを改めて自分の目で見直すということが必要になってきますし、また新島精神の基本がキリスト教であるということも自明のことですから、やはりキリスト教は何であるのかということを問い直さなくてはならない。そうなってきますと、私は、新島精神は、同志社に来る一人一人に改めて解釈

をし直させる余裕を与えてくれているのじゃないか、そういうふうな気がするわけです。

言いかえますと、新島襄自身がどこかに新島精神とは以下のとおり、といって特別な定義を与えていないところが、すばらしいと思うのです。もちろん遺言は重要ですけれども、しかしあれで全部がつくされているような気がしないわけです。たとえば、新島精神即キリスト教といたしますと、ちょっと困りますのは、新島襄にはひじょうな愛国主義があった。私がキリスト教を勉強したかぎりでは、必ずしも愛国主義は聖書からじかに出てこないような気がしますが、その点、新島襄はもっと日本人であったという気がします。そしてこの新島の愛国主義は、たとえば徳富蘇峰のような弟子を通して、新しい形をとって発展したのじゃないかと思います。

鴛淵紹子氏



ワイルド・ローバー号

そういうわけですから、私はもっと大らかに、新島襄がいまいたならば、どう考え、どう反応するだろうかという立場から、毎年解釈し直して、新島精神を滅びないようにするということが、いちばん肝心なことじゃないかと思うのです。同志社精神ということになりますと、同志社に来て新島襄のことを学び、いろいろ考えた人々の考えの集大成のようなもので、したがって日々に新たにというところが、私は同志社二百年に向かっての希望であるわけです。

井上　ありがとうございました。鴛淵先生どうぞ。

鴛淵　私も都間先生と同じように、子供の頃から、ずっと同志社の近くに住んでいて、幼稚園、女学校、大学と同志社で育ったものですから、改めて新島精神とは何か、同志社精神は、と、いわれると、かえってどぎまぎしてしまいます。

たしかに、先生方がすでにおっしゃっていますように、同志社精神と新島精神はイコールで、新島精神とキリスト教精神がまたイコールで、すなわち同志社精神はキリスト教精神だ、とこういうことになるわけなのです。女子大学の場合、新入生に渡す「入学のしおり」の中に、新島精神とは何かということがわりあいはっきりと箇条書きにして、「キリスト教精神」、「人格教育の精神」、「自由・独立・平等の精神」、「国際愛の精神」というふうに書いてあります。でも、こういうふうにいわれると、私自身、同志社の立学の精神は何とすばらしいものだなと思う反面、これを実現し、まもることは実に大変なものだという感じがします。おそらく毎年入ってこられる学生さんたちにも同様に感じられるのではないでしょうか。項目としてあげるには、このように言うべきなのでしょうが、私は、もし自分が、もっと具体的に新島精神について説明するとすれば、どう言えばよいだろうかといろいろ考えてみました。そしてつぎのよ

井上勝也氏

うな説明をすることにしました。すなわち、新島精神をもつということは、まず第一に、神を敬う心をもつこと。人間が、自分たちが最高のいきものであるというような思い上がりの心をもたず、神の前にひとしく平等であると考えること。ひろく、自由な思想をもち、たくましい独立心をもつこと。いかなる環境においてもなくてはならぬ人になること。強い精神力と同時に、すべての人にやさしく、愛情をもって接することの出来る人になること。事を処するに当って、きちんと後始末の出来る人、すなわち責任感をもって、良心的に仕事の出来る人であること。――あまりにもちがった表現になりすぎたかも知れませんが、同志社精神、あるいは新島精神を私なりに解釈してゆくとき、このような言い方もできるのではないかと考えてみたわけです。

井上　ありがとうございました。六人の先生方から〝新島精神とは何か〟という問題についてお答えをいただきましたが、新島精神を定義して、固定的に考えるのではなくて、つねに現代的に解釈し直すところに意味があるのではないかという北垣先生のご指摘もありましたので、改めて新島精神を整理し、まとめあげるということをしないほうがよろしいかと思いますが、結局新島精神というのはキリスト教精神ではないかというご発言、その中身は愛と良心、あるいは憂国済民といいましょうか、それから平民主義、自由独立、個性の尊重、こういうものは、具体的には、たとえば「自責のむち」に示され、あるいは「良心を手腕に運用する人物」の育成ということばに示されているのではないかと、そういうご意見でございました。新島精神というのは、つねにその時代、その社会にあって問い直され、現代的に解釈し直されるところにその意義があるということで、いちおう、〝新島精神とは何か〟という点についてはこの辺で終わりまして、過去百年の同志社の歴史のなかで、いまお話いただいたような新島精神が、教学、経営の面でどのように生かされ、またどのような人物を育成したかということにつきまして、自由にお話をいただきたいと思います。

新島精神――過去

久永　キリスト教教育の中心は、礼拝と聖書講義だと思います。同志社は、明治から第二次世界大戦の終わりまで、これを守るためにたいへんな迫害をうけたり、苦渋を忍んできたと思います。一部の人々の中に、同志社大学が誕生したのは明治四十五年なのだから、同志社英学校の本流は同志社中学に流れているんだというふうに解釈したり、またそう言われる方もありますが、私はそうは思いません。「同志社大学設立の旨意」の骨子案ができましたのは、明治の十五年でした。新島先生は初めから同志社大学を設立することを目標に掲げておられましたし、大学は明治四十五年に生まれたのじゃなくて、初めから生まれていたと思うのです。同志社大学はもちろん明治時代はずっと専門学校でしたが、同志社中学も普通学校とか尋常中学校、ある

いは英学校といってきました。そして、両者はいっしょに仲よく歩調をそろえて、というよりも溶け合って育ってきたと思うのです。明治の三十九年までは、神学校と専門学校と同志社普通学校は、人数も少なかったのでしょうが八〇〇名くらい入るチャペルでみんないっしょに礼拝していたのです。私がある方に「中学校の一年生のような幼い生徒と、専門学校の大きな学生がいっしょで、説教なさる先生はどんな話をされたのですか」と聞きましたら、「ひじょうに平易なことばで、わかりやすい内容のことを話しておられた。ラーネッド先生のお祈りは、ほんとうに素朴な、だれにもわかるような祈りだった。お話もそうだった」そうです。だから、明治の三十九年まではいっしょに礼拝がおこなわれており、四十年になってはじめて普通学校が少し人数がふえてきたので、チャペルで礼拝をおこない、神学校と専門学校はいまのクラーク館の二階で礼拝をおこなうようになったそうです。しかしそれ以後も、運動会とか水上運動会（ボートレースのことですが）とか、卒業式とか、いろんな行事はみな普通学校と専門学校、つまり大学といっしょに仲よくおこなわれていたようです。だから、宗教教育というのは、中学校がやったとか大学がやったというのじゃなくて、同志社がやったのだと私は思います。

創立当初を振り返ってみますと、いまのアーモスト館の所にあった豆腐屋の二階、これは三十番教室といわれていましたが、新島先生は学内で聖書の授業ができないので、そこでなさっていた。ところが、礼拝のほうは、クラーク館のところに第二寮というのがあり、そこでおこなわれていました。それは寄宿舎と教場とチャペルを兼ねたような建物だったそうですが、いま、田辺の校地にそれが復元されています。そのなかの小さな講堂で、さきほどお話に出ました、先生が自分の左手を打たれた場面が演じられたそうです。礼拝もひそやかにおこなわれていたような気がします。

次に、そのあとをたどってみますと、明治の二十年代から三十年代にかけて、これはほかのキリスト教主義の学校も同じだったそうですが、徴兵猶予の恩典が同志社には与えられなかった。そのためにどんどん学生数が減っていって、同志社には苦難のときがあったのです。明治の三十一年、横井社長のときに、この苦渋から逃れるためにキリスト教主義の綱領の変更が行われた。当然のことでしょうが、内外の猛烈な突きあげがあって、首脳陣が総辞職をしました。しかし、三十二年にはまたその綱領が復活したのです。その理由は、日本政府がキリスト教主義の学校に弱いものいじめをしている、それがアメリカの宣教師団やアメリカ公使にわかって、日本政府に彼らの糾弾の鉾先が向けられたのです。彼らによって、日本はひじょうに野蛮な国だと非難されたものだから、やむをえず日本政府が姿勢を正して、徴兵猶予の恩典をキリスト教主義の学校にも与えるようになった。同志社が復興しはじめたのはそれからですね。

ところが、戦前と戦争中のことを私自身が振り返ってみますと、まず頭に思い浮かぶのは例の有終館の火事です。天皇陛下が御所に滞在されているときに、火事で焼けて、首脳陣が総退陣しましたが、あのころのことを考えてみますと、そのころからキリスト教主義の学校にたいして、聖書講義や礼拝に対して、弾圧がじわじわと加わってきていたと思うのです。私は中学三年で、まだ何もわから

なかったのですが、中学三年のときに軍事教練が入ってきて、その年の秋に、御所で閲兵分列式がありました。公立の一中、二中、三中が先頭に立つのは当然でしょうが、私立のほかの学校もそのあとにずっと続いて、同志社中学生の集団が最後尾でした。各種学校並みの扱いだったのです。それで先生に問いただしたところ、そのわけはこうだというのです。つまり、同志社中学では聖書の授業をやり、礼拝をおこなっているから、われわれの学校を同志社中学校と呼ぶことができないんだと。そういう説明をうけて、ほんとにくやしいやら、むかつくやらで、私は一日興奮していました。

井上　何年ごろですか。

久永　大正十五年、昭和元年ごろですね。――そういうふうにとにかくキリスト教主義であるために、どれほど痛めつけられたかわかりません。そして、満州事変、日中戦争、太平洋戦争と進むにつれて、それがますますはげしくなった。そして、その迫害が終戦までつづいたのです。終戦とともに解放されたのですが、私は、終戦のときは三十五歳になっていましたし、考えれば、ずいぶん長い間です。だから、同志社がこんなにも苦闘してがんばり通して支えてきたころの礼拝と聖書講義、これをしっかりと、それも、枯れたようなものじゃなく、いつもみずみずしく生きたものとして保持していかなくてはならないと思います。

萩原　ただ、同志社のなかでも、大学で新島先生について、説かれることは、早くから不活発だったようですね。新島先生について積極的に教えるという任務は、むしろ中学校がやっておられたようです。

久永　そうですね。大学というのは専門学校のことで、学生がひじょうに少ないんです。記録によりますと、大正七年に中学生が七〇〇名、大学生が七〇〇名、この頃でやっと同数になっています。

萩原　大正の末年ですか、「同志社の同志三千」とかいうことばが生まれ、女子部も含めて三、〇〇〇人規模の同志社では、まとまりのよい環境で教育がなされたということです。

これは大正期の卒業生がいわれたことですが、その頃は、毎週総長が同志社の各校をまわって演説をなされたというのです。あれがひじょうに印象に残っていることだと、なつかしがっておられました。これも大正五年から十年頃の同志社中学の話ですが、波多野培根先生が教頭の任務についておられたときなど、ひじょうに熱心に新島伝を教えられたということを伺っております。そのころの中学の先生には、新島先生に人格的に接触された方がかなり多数いらっしゃったのではないでしょうか。三輪源造先生、牧野南山先生、加藤延年先生もそうでしょう。直接新島先生の薫陶を受けられた方が教壇に立って、新島精神をうけつがねばならないという使命感にもえて教育がなされたところに、同志社中学の使命と特異な性格があったのではないでしょうか。

久永　それらの先生方はみな公立とかほかの職場におられたのですが、同志社に来て、俸給がグッとダウンした。それでも同志社を守るために復帰してこられた。私、古い『同志社時報』や、同志社中学の学友会誌を読みましたが、おそらく明治以来波多野培根先生の時代が同志社中学の黄金時代だったと思いますね。ほんとうにりっぱな先生でした。

萩原　おそらく田畑忍先生や和田洋一先生

などはそのころの生徒でしょう。

久永　そうです。中村遙先生なども……。

鴛淵　たしかに同志社の教育のなかから、礼拝のことと、聖書をのけてしまったら、同志社という私学の特徴はなくなってしまうと思います。古い卒業生の方々は、とくに若いころ、いま久永先生は中学校とおっしゃいましたが、いわゆる女学校時代に神を知り、礼拝を毎日まもったということが非常に幸せなことであったというふうによく言われます。ただ現在は、時代の流れということと、同志社があまりにも大きくなったということが、いろいろな意味ですべてむずかしくしているのではないかと思います。

私が女学校の一、二年の頃、もう太平洋戦争は既に始まっていたのですが、週に一回、女学校と女子専門学校は合同で礼拝をおこなっていました。話の内容は、時には低学年の生徒にむずかしいこともありましたが、当時一緒にうたった讃美歌や、聖句のいくつかはいまでもよく思い出すことがあります。

ですから女子部の場合は、男子校ほどにキリスト教に対する迫害ははげしくなかったと思いますが――もっとも私など生徒でしたから何も知らないわけですが――礼拝と聖書の授業、そして新島伝を一年生に教えられるということが、非常に長く、順調につづいてきたと思います。ついでですが、全学園合同の卒業式は、戦後一度だけ復活し、それが最後になりました。昭和23年3月で、私が女学校五年生を終えた年です。戦時中、栄光館では礼拝が出来なくなってからも、女子部の教職員と生徒の有志は、幼稚園で毎朝礼拝をいたしました。ですから女子部では、男のほうの学校から比べると、そういう伝統がわりあい長くつづいていたので、比較的古い卒業生の方は、ほとんどといっていいくらい礼拝と聖書のことが印象に残っているといわれるわけなんですね。現在の人になってくると、とくに大学もそうですが、女子大でも礼拝は自由出席なものですから少ないときはほんとに数えるほどしかおりません。ところが、それでいてなおかつ卒業してしまうと礼拝が印象に残っていると言う人が多いのです。だから、同志社において礼拝と聖書の勉強をさせるということは、やはりいつでも基本に残しておくべきものじゃないでしょうか。

井上　明治二十一年から昭和二十二年まで、デントン先生が約六十年間同志社における女子教育に専心された意義はひじょうに大きいですね。

鴛淵　デントン先生という方は本当にえらい方だったと思います。私などは晩年の先生をおみかけしては魔法使いのおばあさんがいやはる、怖い怖いと言いながら裏門から走って帰ったことがありますけれども（笑）、ああいう方はいまの時代ではちょっと望めないでしょうね。

都間　私もちょうど同じころに同志社に学びましたが、当時の私たちの受けた同志社の教育に比べ、今、何か大切なものが稀薄になり、又すでに欠けてしまっていて、それをおもうと、それをだれが補うのだろう、だれかがかわりにうけて立つべきなのだと思うのです。いまデントン先生のお話が出ましたけれども、デントン先生はたしかに卓越した方でしたが、そのほかにたくさん立派な宣教師の方がいらっしゃいましたね。そしてその方々から専門の知識、学科を学んだのはもちろんのこと、そういう教科の教授以外に、勇気と責任において、隣人を愛することにおいて、多くの感動を与えられたのでした。英語で書

かれた「詩篇」の抜粋をくださったり、最初と最後の授業はお祈りされたそれらの一つ一つは、やはりあとになって、ひじょうに大切なことであったとおもわれます。いま宣教師の方とはほとんど接することもなく、この方たちのひじょうに大きく働いていらっしゃった貢献を、だれかがゆずりうけなければいけないということを、真剣に考えます。

井上　新島精神とか同志社精神と申しますが、同志社創立当初、明治十年代から二十年代にかけての宣教師の果たした役割は、もっと高く評価していく必要がありましょうね。

萩原　とくにラーネッド先生、デビス先生、デントン先生などの役割は大きいと思うんです。しかしやはり日本の風土に根ざしたキリスト教主義の教育を創造するのですから、新島精神を受け継いでいこうという使命に燃えた、かつての同志社大学の先生でも、同志社中学の先生でも、すぐれた方々が多かったと思うのです。

さきほどの補足になりますが、波多野培根先生の場合、同志社中学二年生に新島伝を説いておられたようですね。そのころは毎時間ガリ版を刷ってこられて、丹念に教えられたということを伺っております。それから、大正末、昭和初期の頃になると、藤田万右衛門という先生が、新島伝を教えられたようです。その当時は、いま北垣先生が現代訳をなさっておられますデビス先生の『新島伝』を使われたようです。そして、さらに、若い世代になりますと、すなわち、五十歳前後の方々、あるいは三十代後半から、四十代、この年代の人たちは、亡くなられた柳島彦作先生から、新島精神を学んだといわれております。柳島先生のことばと人格とを通じて新島先生についての強烈な印象を与えられたということを伺っております。何かどろどろとしてよくわからないけれども、すごいところに入学したんだなあという気持を、当時の中学生はもったといわれております。だから、まさに波多野先生から柳島先生に至り久永先生に受け継がれているような大きな流れが、同志社教育を支える一つの良心であったというふうにさえ私は思いたいのです。

上田　私が同志社中学に入ったのが昭和十三年、卒業したのが昭和十八年ですから、戦争に突入するころなんですが、いま久永先生はひじょうに圧迫を受けたというようなことをおっしゃいましたけれど、私は生徒でおって全然そういう気がしなかったのです。というのは、ひじょうに温かい学校であって、少なくとも生徒にはそういう風は全然当たらなかったという気がするんですね。おそらく当時の先生方には、かなり強い圧迫があったのだろうと思うのですが、少なくとも当時生徒であったわれわれのところまでは、そういう風は届かなかった。むしろその当時からおられた先生方、前窪先生、中堀先生、玉松先生、加藤先生それからいまお話の柳島先生、そういった先生方を通して昔の同志社の伝統が示されておった。それをひじょうに強く感じるんですね。そのことは、同志社中学を卒業して官立の高等学校に入ったときに同志社中学との差の大きさにひじょうに戸惑いました。

鴛淵　私の知っている方で、中学校は同志社を出て、あとは官立の大学に入って、現在も国立の先生をしておられる方が、十代のときに同志社で教育を受けたことがいまになってひじょうによかったと言っておられるのですが、そういうことを聞くと同志社のいままでやってきた教育の根本にあるものがまちが

っていない――まちがっていない、などというと怒られますけれども、とにかくそういう意味で、できるだけ若い時代に、それこそ汝の若き日に創造主を覚えよといいますけれども、やはりほんとうにだいじなことじゃないか、そういう話を、かえって外におられる方から聞かされて、なるほどと思うわけです。

萩原　私も同じようなことを大正二年の卒業生から聞いたことがありますよ。大二会という同志社中学校卒業生の会がございます。大正二年と申しますと、同中が普通学校から中学に変わった時期です。卒業生には、原忠雄、竹内愛二、原田健、山本宣治、梅原末治といったすぐれた先生方がおられます。この外にも国立大学の先生になられたり、実業界で活躍された方が沢山おられます。この人たちが集まって会をもたれますと、いい学校は同志社だった。三高は自由の学舎（まなびや）だというけれども、それよりも同志社中学のほうがよほど自由でいい学校だったというような印象をみなもっておられるのです。だから、八十をこえた世代からずっとそうなのですよ。なぜそんなによかったのでしょうね。そしてすぐれた人材が育ったのでしょうか（笑）……

久永　さきほど上田先生が圧迫を直接に感じなかったといわれたのは、先生方が防波堤になっていたからです。一度、木村清松という牧師が戦争中に来られて宗教キャンペーンを起こされたことがあります。そして、かなりたくさんの者が洗礼を受けました。すると、あとで受洗者が軍事教官に頬を殴られました。ですから、上田先生のご存じないところでは、やはりきびしいものがあったのですね。また、軍事教官に批判的なある若い京大出の先生の担任の生徒が教官に殴られて、江戸のかたきを長崎で討たれたようなこともありました。そのように教員室では激しかったけれども、生徒までは一部をのぞいて伝わっていないのです。

萩原　そうすると、迫害があったから同志社はよかったということですね（笑）。

久永　そうかもしれません。いまはぬるま湯だから。

北垣　私は敗戦後二年たったころ同志社大学に入りました。ひじょうに暮らしのきつかったころ、学生としてはじめてキリスト教というものに接しました。当時よくがんばって献身している自発的な学生のグループがありまして、そのグループの主催する各種の行事にときどき顔を出して、感化をうけたように記憶しています。当時同志社に湯浅総長の顧問としてシーベリー女史が来ていらした。ああいった方もいい刺激を与えられたと思っておりますし、そのころクリスチャンの学生たちは、女専の学生と共同で、たとえばコーヒー・アワーというのをやったりして、一生懸命に啓発、啓蒙のための運動をいたしましたし、また福井に大地震があったときには、みずから部隊を組織して救援に赴き、そこでまた強められて帰ってくる。そういう自覚的なボランティアの運動があったことを覚えているんです。私自身は参加しませんでしたけれども、友人のかなりがそれに入っておりましたので、そのことは忘れることができません。ただ、日本が経済的に復興いたしましてから、そのようなボランティアの精神が同志社においてもだんだん衰えていき、ついに大学紛争の嵐にまきこまれてしまってからは、自発的なキリスト者学生の会としては、いま学園のなかではほとんど見ることができないというのが現状ですね。皮肉だと思います。

かといって、もう一ぺん迫害の時代よ来い

というわけにもいきませんので、どうやって同志社のそういうよい伝統を新しい時代に探っていくのかということが、大学の宗教部、あるいはキリスト者である教師たち、学生たちに与えられているだいじな課題だと思っております。このだいじな百周年に、これこそが答えだと確信をもって一致してそっちへ行けるような回答がないことを、ひじょうに残念に思います。百周年がまだ模索の時代であるということは残念ですが、それが特色じゃないでしょうか。なお、私は同志社の生み出した数々の有名な卒業生に興味をもつと同時に、日本中にちらばって、こつこつと人知れず世のためにつくしている無名の卒業生に興味をもっています。そういう人たちは、「地の塩」という聖書の言葉を生きているのです。そういう人が沢山いることを私は知っています。

萩原　私は昭和三十年代に同志社に入ったのですが、上州で少年時代から印象づけられていた同志社と、現実の姿が違うという点では、ずいぶん迷ったこともあるのです。それでも比較的多くの先生が講義のとき、新島先生についていろいろお話くださったのが、などが、しばしばよく新島先生と同志社について語っておられました。ですから、昭和三十年代に入ってひじょうにマスプロ化が進み、教育の形骸化があらわれましたけれども、まだ同志社にはこのすぐれた伝統を守ろうという意欲にもえる先生方がおられたものと思います。

住谷先生、田畑先生、岡本先生、志賀先生、

ついで、当時の学生の姿勢です。関東から同志社に学ぶ学生というのは、やはり群馬県が多いわけですね。東京に早稲田、慶応があっても、同志社にやりたいという家庭があるわけです。そういう環境ですから、夏休みに、グリークラブを前橋に招いて演奏会をやったこともございます。それでえた収益金をもとにして、魚木先生の『新島襄――人と思想』をたくさん買い、これを県下の高等学校、高崎と前橋市の小・中学校に全部配布したことを覚えております。そういうことを、ごくあたり前のこととしてやってきたものです。

それに、当時の学生運動を見ておりますと、学部自治会の旗と並んで、新島先生の肖像画をかついで行くという風景さえ見られました。早稲田の学生が、警官隊の面前でも『都の西北』を歌い、京大の学生が河上肇先生の肖像をかついでデモに出るように、同志社の学生は新島先生の肖像をかついだものです。ときには先生の墓前でハンストをする学生もおりました。当時の学生のあいだには、新島先生の精神を無視しては、なにも語れない、新島精神を掲げて進もうという雰囲気がまだあったようです。これが決定的につぶされたのは、北垣先生がおっしゃるように高度成長と政府の私学無視政策のヒズミが大学で爆発した学園紛争だったというように思うのです。

新島精神――現在

井上　いまお話をいただきまして、官学とは異なった私学同志社のよさとともに、ウィークな部分もおふれいただいたかと思います。現在同志社は二万八〇〇〇の学生・生徒を擁しておりますが、このなかで新島精神がどのように生かされようとしているのか、そういった点につきまして、各学校の実情をお話いただきたいと思います。

北垣　大学がおそらくいちばん情けない状

況と思いますので、思いついたことを述べさせていただきます。新制大学になりました昭和二十三年から宗教学という科目が必須科目でありまして、全員とることになっておりました。それには宗教学の専任の担当者のみならず、神学部の先生方が協力してくださって今日に至っております。新制大学で私も山崎先生から宗教学を習った思い出があります。

ところが、例の六九年の紛争を契機に、宗教学が形骸化しているという反省から、選択にしたほうがいいのではないかということで、経済学部、商学部などが選択制にふみ切りました。しかし、やはりそれでは新島の望んでいた宗教教育から遠ざかることになるので、なんとかこれを元に返そうという努力を、いま大学では一般教育委員会のなかで、いろんな改革案を出す過程でやっております。女子大では宗教学といわないで「聖書」とはっきり規定していらっしゃる。これは私は卓見だと思っております。大学のほうでは聖書と限定しないで、宗教学といい、宗教の現象、宗教哲学、キリスト教神学、比較宗教学、いろんな立場からの宗教へのアプローチ、これが必要であるというふうに規定して今日に至っています。

いまのところ新しいアイディアといたしましては、一般教育科目のなかで、人文、社会、自然分野に加えて、宗教分野というものをつくってみようという考えが出ています。これを取れば、人文もしくは社会の単位にカウントするということで、暫新なアイディアを宗教学に入れることが研究されている最中です。これは正課の面でありますが、その他チャペルアワーを毎週一回、一部、二部ともやります。しかし出席の人数はやはり講師の顔ぶれによるというのが現状です。それと、水曜日の二講時目は、かつてはチャペル・アッセンブリーの時間ということでひじょうにだいじに守られてきましたけれども、結局この時間が課外活動に使われはじめまして、六九年の紛争の後では、あの時間に正課の授業もおこなわれるということになって、ガタがきているのが現状です。そういったことをなおすために、最近では松山学長のひじょうな努力のもとに宗教主任制を大学で復活いたしまして、たとえば最近文学部などにおきましては、文学部としての礼拝を夏休み前にやりまして、きょうの司会の井上先生から新島襄に関するりっぱなお話を聞いて、感銘をうけたようなことがありました。

それ以外では、なんとかクリスチャンの教師を獲得、養成しながら、頑張っていく努力をしなければだめだと考えます。この点で私は、ペシミスティックでありながらも、なおほんとうの精神は少数派に伝わるかもしれないと思い、望みを失わないでおります。

井上 ありがとうございました。女子大学はいかがですか。

鴛淵 女子大でも、教育としてのキリスト教の問題はひじょうにむつかしいことです。聖書を時間割に組み入れると、カリキュラムが一般の大学のカリキュラムよりふえるわけなんですね。それで聖書を選択制にするかという話もないことはないわけなのです。でも結局いまのところ女子大では、聖書をカリキュラムからはずすとかいうことは一応タブーということになっていて、現在一・二・三年生の必須科目になっております。ただ、女子大学ができたときに、人間関係というひじょうに特殊な科目が置かれたのですが、この科目はことし卒業した学年をもって廃止されてしまいました。最近いろんな新設の大学で人

間関係学科というようなのを申請したりしているところがあるときに、同志社ではやめちゃったというのは、なにか皮肉なような気がします。しかし、とにかく礼拝と聖書の時間は、どんなことがあっても残すべきだと考えております。これを担当される先生はたいへんですし、私自身も毎日オルガンを弾いていて、礼拝がなかったら楽になるのになと思ったりもしますけれども、それではいけない、われわれのように同志社で育ったものが頑張らなくてはならないと思いかえすわけです。同志社の根本の理念は、どういう状態のときでも語り伝えていかなければならないものですし、礼拝と聖書の時間をもちつづけることと、いろんな方が、折にふれ新島先生のことを語っていただきたいと思います。また、キリスト教と関連した学問の分野でも、常に関心をもたせてゆくように心がけてほしいものです。そのときは、またキリスト教のことを言っている、くらいに学生は思うかも知れませんが、いつも聞かされているということは、やはりだいじな事だと思います。礼拝を毎日やるということも、ほんとうにいま同志社内のどこの学校でもたいへんなことだと思いますが、講師の交流をはかったり、協力し合って、つづけてゆくべきだと思います。私なんかも結局同志社出身の教師として礼拝を守らなければということをつねづね考え、またこのたび改めて考えたようなしだいです。

井上　ありがとうございました。女子中高はいかがですか。

都間　卒業生が在学中にはあるいは煩わしかったかもしれないし、消化不良になっていたかもしれないそういう聖書と讃美歌、それがほんとうに自分たちの長い人生を支えてくれていることがだんだんわかってきたという、そういうことを聞かされて、やはりこれでいいのだという確信をもって、いま学校では宗教教育を見直しております。毎朝の礼拝も、時おり外の牧師先生とか大学の先生を迎えて特別礼拝を持っておりますし、授業のなかでは聖書の時間がございますから、中学の一年生の初めに新島伝を学び、中二、中三と上がっていき、イスラエル中心の旧約、福音書による新約を学ぶ。上級になりますと、社会史、更に、キリスト教倫理・社会観を学び、文学を通してのキリスト教的な人間観とか宗教観というふうなものにも目ざめていくような、そういう授業を受けることができるようになっています。又、感謝祭、クリスマスページェント、花の日にはベルクワィヤーの奉仕もすばらしく、魂の深め、浄められるのを覚えます。

宗教部とか、YWCAであるとか、そういうものが、わずかですけれども、ともすれば消えそうになる灯をとにかく絶やさないようにクラブとして奉仕する。自分の力で何かができたよろこびを感じ、励むようにしてあげたい。同志社の精神に合った活動の一つじゃないかというふうな気持ちで今後も指導していきたいとおもいます。

井上　ありがとうございました。香里はいかがですか。

萩原　香里は学校自身が新しいわけです。合併後四半世紀をかけて、宗教教育をつみあげてきました。そこには明治の大阪につくられた組合派系教会経営の男子学校、泰西学館再建の夢が託されていたとさえ、一部では伝えられております。

いちおう現状を申しますと、聖書教育のうち、キリスト教理解のためには、教育同盟の編集した教科書を用いているようです。新島

先生に関しましては、中学校の一年で岡本清一先生が書かれた『新島襄伝』を使って授業がなされ、高校一年では、大塚節治先生が放送された内容をまとめまして、香里の聖書科が編集した『同志社の精神』というパンフレットを教材として教えているのです。これは聖書科の先生がたの仕事です。

ついで、宗教委員会が何をやるかということです。まず『同志社の礼拝について』というパンフレットを発行し、新入生に配布するということをやっております。ついで礼拝ですが、生徒数がひじょうにふえて、中・高で約一千数百名ですから、各学年が二週間に一ぺん、五〇分のロングチャペルをやるということと、それから一週間に一度、二〇分のショート礼拝をおこなっております。生徒の通学範囲が広く、通学に長時間を要しますから、始業前の礼拝は無理です。そこで、一時間目と二時間目の間にショート礼拝をやるわけです。しかしこれでも出席率が悪いとか、さわがしいとかの批判がございました。

そこで去年の冬からことしにかけて、高校生徒会がなんとかして礼拝をきっちりしようという運動をやったわけです。生徒たちは、同志社女子高にも行きましたし、あるいは神戸の松蔭や、神戸女学院、桃山学院等々を訪れて、礼拝に関するデータを集め、パンフレットをつくり、それを生徒に配り、礼拝を改革しようとの努力を続けました。その成果もあがり、以前よりは礼拝の態度もよくなりました。とくに高校三年生がまじめです。すばらしい生徒がいるものですね。しかし、聖書科の先生だけが同志社の精神を説き、新島先生伝を話すということでいいのでしょうか。全同志社に、教師として有能なうえに、キリスト者としてもすぐれた先生がふえてほしいし、同志社五中・高の教師は、すべて新島先生について、生徒に語りうる力を養うことが必要ではないかと思います。同志社教育にたずさわる教師の気がまえをそこにまでもっていかなければならないと考えるのです。むろん、校長はその先頭に立つべきでしょう。外にでて感じることですが、キリスト教主義学校はたしかに日本にございます。立教、青山、明治学院などはそうでしょう。けれども、現在の同志社は果してどうなのでしょうか。恥かしいことですが、それほどいまの同志社には、教師・学生・生徒が一体となって宗教教育をすすめ、新島精神を学び、現代における同志社の使命を考えるという姿勢が欠けてしまったように思うのです。その点では、慶応のほうが、福沢先生について厳格な教育をしているようです。もっとも慶応の場合には、福沢批判を許しませんね。辞令も、教授何々君で、「先生」というのは福沢先生だけなのです。あれがいいかどうかという点においては疑問がありましょう。おそらくにが笑いされているのは地下の福沢先生ですよ。先生はひじょうに豪放磊落、奇想天外に生きられた方ですから。しかし、慶応の場合、通信教育の学生でも福沢先生に関するレポートを提出しないと卒業できないのです。『文明論の概略』とか、『福翁自伝』、あるいは『学問のすすめ』、そういうものがきちんと必修科目に組まれていて、それらを学んで大学を卒業することになっておるのです。おそらく幼稚舎でも、中学部や普通部でも、三つの塾高でも福沢先生についての教育がしっかりなされていることと思います。そういう状況と比べた場合に、いかに現在の同志社はたちおくれてしまったか、本当に残念です。ただ、幸い私は香里でオルフォイス・グリー

クラブの顧問をやっております。前任顧問は西邨辰三郎先生です。この部は、立学の志を同じくする新島学園聖歌隊と、交歓会をおこなっておりますし、合宿に行った場合には、一貫教育をやろうというわけで、先輩にも来ていただき、毎朝六時に起きて礼拝をし、ときには新島先生の生涯について語り合うこともございます。歌の技術だけをうまくするのではなく、同志社のキリスト教精神を歌に託し新島先生の良き子供や孫を育てるつもりで、私たちなりに何かやっているつもりです。

上田　岩倉の場合も、礼拝はいちおう毎朝始業の前にやっています。しかし、女子中高のようにひじょうに静かな礼拝というわけにはゆかず、騒がしいことが多い。北垣先生にも先日お話を願ったのでよくご存じだと思います。先生は、「声の壁にはなれていますから」となぐさめてくださいましたがそういうような状況です。

そういうことで、礼拝というものがいつも問題にされるんですね。ときには生徒のなかから、ときには先生方のなかから、この状態でいいだろうか、なんとかしなければいけないのじゃないかというような問題、それからまた礼拝の本質は何だろうかといったようなこと、また、いまは全生徒に出席を強制しているんですが、自発的な行為であるはずの礼拝に、出席をとることの意味は何かといったような問題ですね。

数年前にもそういった礼拝の問題をなんとか解決しようと宗教部を中心にして教員会議でもかなり真剣に論議をして改革案を考えたことがあります。もっとも、この改革案はその主旨と、生徒の受け取り方との間にかなりのズレがあったために、残念ながら日の目を見ずに終りましたが。しかし、礼拝の問題がそうやって論議されるということ自体はひじょうにいいことじゃないかと思います。けっして礼拝らしい礼拝がおこなわれているということはいえませんけれども、そういったことを続けてやっている、そしてそれがつねに論議をされる、その本質が問い続けられるということが同志社教育じゃないだろうかと私は思うんです。

また、在学中、礼拝にどれだけ騒がしくしておっても、卒業すると、そういった礼拝にやはり愛着を感じるんですね。昨年秋、高校の同窓会の総会をおこなったんですが、そのときに彼らは先ず礼拝から始めるんですね。今年もそうです。そのことを考えますと、私どものやっていることは種をまいているんだ、そしてそれはそのときは見えないけれども、いつかはそれが大きな樹に成長してくれるんだ、そこに希望をつないでやっていくことが大切なんじゃないかと感じながら、自己満足かもしれませんけれども、やっている次第です。ただ残念なのは、クリスチャン以外の先生方もよく協力はしてくださいますけれども、やはり礼拝の担い手であるクリスチャン教師の数が最近ひじょうに減ってきているということ、そのことは、まさに同志社教育にとっては憂慮すべき状態であると感じております。

井上　ありがとうございました。中学校は……。

久永　女子部のほうは戦争中もずっと礼拝をつづけておられた。しかし中学校のほうは戦争の末期、一年だったか、二年だったか、とだえているんです。これは抵抗が強かったとか弱かったというのじゃなくて、男子の学校と女子の学校では、軍部からの圧迫の力に差

があったからだと思います。第一、末光先生が、同志社中学の校長から女子部のほうへ、左遷というと語弊がありますが、行かれましたのも、男子の学校に風当たりがきつかったからです。そしてそのあとに海軍大佐の野村先生が校長になられましたが、軍部の圧迫を防ぐための手段だったと思います。そのとき若い先生たちがそれをサポートされたのも多少分る気がします。ですから、戦争の末期、礼拝がとだえて、皇居遙拝をやっていたのですが、それでもクリスチャンの先生方は彰栄館の二階で祈禱会を断続的にでも続けていられましたから、それを考慮に入れれば、百年間、一日も礼拝はとだえなかったと言い切れると思います。

その礼拝の話なんですが、現在同志社中学校では、外部の牧師先生が週に一回と、讃美歌礼拝の日が一回、あとの四回はみんなの先生がかわりあっておこない、ときには外部の方もおいでになる。たとえば松山学長が去年、先輩としておいでになりました。そのときにやはり戦争中に同志社中学で受けた、ある貴重なものが自分を支えてくれているというようなことをおっしゃいました。そして、そのあとで話が出たんですが、松山さんが弁論部のキャプテンで、私が弁論部長のとき、もう一人二人の弁論部員の生徒といっしょに、昭和十五年の秋、瀬田で満月を見に船を出しているんです。そのときの写真がありますが、私は中学生の帽子をかぶり、生徒のほうが私のソフト帽をかぶって写真に写っているんです。日中戦争のさなかだったのですが、あの戦争のきびしさのなかで、ほんとうに和やかなムードがあった。そういうものをやはり松山さんらが受けとめていてくれたのだと思うのです。戦争中の生徒と私どもとの交わりがやはりいちばん濃いですね。千宗室さんも戦争中の生徒で、松山さんと同じ学年でしたが、イエスの話を礼拝でされたのです。あの方は大徳寺とのつながりがあるから、仏教徒なのですが、イエスの話を彼がされるということは、やはり中学校時代に受けられたものが根をすえているんだと思います。それから江崎玲於奈氏が去年来られたときに、礼拝に間に合わなくて、アッセンブリーの形になりましたが、チャペルで壇上に立って、「私はそこに坐っておったんだよ」と生徒に呼びかけられ、戦争中に自分が受けたいろんな大切なことを話されました。近く、復活同窓会を開くのですが、その同窓会誌にのせるために、江崎さんに原稿を書いてくれといって手紙を出しました。わずか三枚の原稿ですが、そのなかに、私も五十歳になってそろそろ昔が懐しくなってきたのか、しきりに同志社中学のことが思い出されると書いてありました。

やはりそういう教師と生徒のつながり、それは卒業してから十年、二十年、三十年たってから芽をふく。つまり、教育というものは、いま種をまいてすぐそこから芽が出るというものじゃなくて、ずっと後になって芽をふくのだと私は思いますね。

礼拝はいまもちゃんとやっていまして、八時に予鈴を鳴らします。彰栄館の鐘が鳴るのです。五分には全部入室しまして、讃美歌の練習をします。一年生が知りませんから。それを三分ぐらいしまして、二分間オルガンのメロディーを聞きながら黙禱をします。十分から礼拝が始まって、二十五分に終わります。クリスチャンでない先生方は、自分の体験談、あるいは教科の話とか、やはり自分がその時点にあって生徒たちにいちばん訴えた

いという話をされますので、それがすなおに生徒に伝わっていくと思います。高校のほうで、もうひとつうまくいかないのは、生徒の年齢もあると思いますが、あの岩倉のチャペルに原因があるのじゃなかろうかと思うんです。中学校のチャペルは生徒の席がごく近い。岩倉はずいぶん離れていて、それに天井が高くて、ほんとうに話しにくい。また反響がよくない。もう少し建築上考えれば、もっといい礼拝がもてるんじゃないかと思うんですが。

新島精神——未来

井上　ありがとうございました。同志社の百年はけっして栄光の歴史であったとは言い切れないと思いますが、現在の私学の教学と経営という厳しい状況のなかにあって、今後二百年に向けて新島精神を高揚していくためにはどうすればいいか、ということについて、同志社を思うものとして、たとえば学校法人同志社にたいして建設的なご意見がありましたら、この機会にお出しいただきたいと思いますが、北垣先生、いかがですか。

北垣　私はいまの問題がいちばんむつかしいと思います。自覚したクリスチャンが、教室内であろうと、教室外であろうと、教える事柄の内容を通してでも、教え方を通してでも、あるいは課外活動を通してでも、機会あるごとに、さきほど言いましたように、新島襄がいまいたならばどうするであろうかという、その原点に戻って物を言い、行動する以外にはなかろうと考えます。生き方、生活の仕方を通しての影響、これが結局新島先生以来感化をよび起こして今日に至っているわけですから、もしそれにつらなっているつもりであれば、自分もまた自分の生き方を通してがんばる以外にないと思うのです。組織的に、これから大きなリヴァイバリズムを期待するというようなことは私にはできないわけでして、そういうことでなく、もっと深化していくためには、個人個人が目ざとくどうすればいいかを考えながら、聖書をしっかり読みながらやっていくより外ないという気がいたします。

井上　ありがとうございました。この機会に、学校法人同志社の新しく選ばれる総長にたいして、こういうことを考えていただけないだろうか、こういうことを実現していただきたいというご意見があればお出しいただきたいと思います。

萩原　たとえば同志社における一貫教育の問題です。ひじょうにいい意見を北垣先生が御殿場の東山荘でご報告なさったのですが、あれを基調にして語り合おうという雰囲気が同志社にあるのでしょうか。どんな改革案を提示しても現在の同志社では困難だと思いますが。たとえば北垣先生が提案なさったような学内高校と大学、女子大学との相互交流の必要です。先生同志の人事交流は独立採算制がブレーキとなって、できないのでしょう。しかし、いろんな障害があっても、その辺からでも相互交流、交換等を活発にしていかなければいけないと思います。すなわち、旧制私立七年制高校を母体にして発足した大学のように、大学の助手、講師が一度は高校の授業をもち、中・高教員が全部とはいえないまでも、大学の講義をもち、大学研究所や、学部・学科の研究会に参加できるシステムをつくることです。一貫教育校である以上、こうしたシステムは、当然なければなりません。同時に、同志社の中・高に在職している先生の現職研修の場をつくることが大切です。で

きれば、同志社教育研究所を設ける構想だっていいはずです。東海大学があれだけ膨大になり、しっかりしているのは、東海教育研究所をもち、「望星」という教育雑誌を出して、東海教育について、理念をたえず追求し、実践の積み上げをこつこつとやっているからです。それに新島研究会をもっと定例化し、活発にすることはできないのでしょうか。さらに申しますと、自主的な教職員の研究団体として同志社教育研究会のようなものが、井上先生あたりの音頭取りでできれば幸いと思っております。

久永　さきほど上田先生が言われましたように、クリスチャンの先生のパーセンテージがだんだん低くなっています。キリスト教主義学校教育同盟に所属しているある学校では、ほとんどの先生がクリスチャンなんですね。これはいけないと思うのです。クリスチャンの先生ばかりですと、かえってマンネリズムになって腐食してしまうのではないでしょうか。やはり、クリスチャンの先生と、ノン・クリスチャンの先生とがたえず切磋琢磨していくところに、生き生きとした学校教育がおこなわれると思います。しかし、あまりにクリスチャンの先生の数が少ないと、やはり新島精神とか、同志社の教育を貫き通すことがむつかしくなると思います。

それで、どうすればいいかということですが、ぬかに釘になってしまっては困るけれど、同志社の中・高の教員の養成機関が大学の一角につくられたらいいと思うんです。ぜひともそれは必要だと思いますね。現在は、先生を入れるのに、外部の各学校に公募しているんです。そうじゃなくて、同志社の大学の卒業生のなかからりっぱな先生を導き入れる。そのためにはそういう教育機関が同志社のなかにつくられるべきだと思いますね。

もう一つのことは、現在高等学校も中学校も昔とちがいまして、業務がひじょうに複雑多岐にわかれて、校長はひじょうに多忙なんです。校長の職務に、財務の面と教育の面と両方があるということは、はたから見ていてもひじょうに困難なつとめだと思うのです。同志社には総長と理事長があって、法人の代表は理事長ですね。そのように中学校や高等学校でも理事長にあたる主事のような人と、総長にかわる校長が並存したらいいと思います。そして法人代表が理事長であるように、中・高の代表が主事であればいいでしょう。主事のほうの権能が校長より上であっていいと思うのですが、校長はクリスチャンで、もっぱらキリスト教教育をおこなってほしいと思うのです。現在、校長はひじょうに多忙で、生徒の授業には出られません。しかし、並存の場合、校長と主事は授業をもったらいいと思います。そして教場で生徒と密着した語り合いがあってはじめて教育が生きてくるでしょう。小さい中学校や高等学校で主事と校長をつくったら、いまでも財政がピンチだのに、困るのじゃないかという疑念にたいしては、双方が一〇時間とか一二時間とか授業をもったらいい。そういうふうにしないと、校長は毎日のいろんな雑務に追われて、とても精神教育をする時間の余裕がない。それで二つに分化したらどうかと思うのです。

都間　私は、いま久永先生のおっしゃったようなこともふまえて、これからの二百年に向かって、同志社が更に大きくなっていくということが、ほんとうに発展なんだろうかということに、繰り返し疑問をいだきます。そういう点に立って、全同志社として、という話が出ましたが、大学、中学、という一つ一

つの単位学校の独立性を保ちながら、やはり全同志社としての一貫性のある教育を明確に打ちだすために、本部のあり方というものにも問題が十分考えられます。更に、同志社は、教職員や生徒だけでなく卒業生と父兄とか、また同志社をいつも遠く、又近くに見、あるときには共鳴し、あるときには批判している、そういう一般の人たちの支持といいますか、外から盛り立ててもらうということも、今日さらに必要じゃないかと思います。

次に、同窓生、校友で、海外に在住して一流の企業で活躍している人がいつも問題にすることは、自分たちが海外で大きく働こうとするときに、自分の子供の教育について困ってしまう。内地の学校に入れて、同志社の教育を受けさせたい。ところが、むこうの学校からこちらの学校への切りかえ、あるいは、もっと大きくなってからの同志社編入ということが、学力、とくに国語のレベルの点で、とてもむつかしい。それでむこうでカレッジ、ユニバーシティーへそのまま進んで行く。すると、今度は、日本に帰ってきたときに、いまの日本では、どの方面に就職するにしても、本人が望んでいるところにはなかなか日本の大学出身者でなければ就職ができない。そこで、子供たちの教育をどうするか、不安なく十分に活躍したいというときに隘路がある、ということをたびたび訴えてこられるのです。片方、ロンドンですか、立教学院の分校のようなものがございますね。なにかそれに似たものを同志社が外につくっていって、奉仕的な仕事をすることもできるんじゃないかと思います。

それからもう一つは、同志社というのは、やはり国際的な理解とか、国際協力を育ててきたし、これからもそういう必要性があると思います。そこで、国際的な寮を同志社で持って（アーモスト館のように）、日本人学生と、留学生との共同生活の場を設けるとか、あるいは上智大学なんかで少し見聞きしたことがございますけれども、うらやましいなと思うのは、外人の先生たちの寮がございますね。そういうものが同志社の力で築ければ、国際性を育てる意義が深いと思われます。

それから学生とか生徒のために、関西学院などのようなワーク・キャンプの施設だとか、玉川学園のような労作教育の機会がもっとあって、私たちも行っていっしょに働きながら、私たちのためでもあるし、また地域の人たちのため、あるいは学校のためになるというような奉仕的な場があればと、考えております。又、中・高生の場合には、できるだけ偉大な魂とのふれ合いの機会を与え、一人ずつのもつ、よき思想に点火することを心がけたくおもいます。

鴛淵　二百年にむかっての具体的な考えはまだ私の頭のなかでまとまっていませんが、同志社を支えて行くには、卒業生の教職員の力が大きいと思います。クリスチャンであるとないとにかかわらず、卒業生の職員は、学校のために頑張らなければなりません。とくに中・高教育のために久永先生のおっしゃっていられるような機関があることは望ましいと思います。

又、同志社は創立以来、外国、とくにアメリカからの援助は、精神面、経済面で非常に多かったことは事実だと思います。すなわち、外から受けたものが多かったのですが、今後の一世紀に向かっては、いま都間先生がおっしゃっているように、いままでわれわれが受けてきたことに対する恩返しの意味も含めて、外へ向かって活躍する機関、またそう

いう場所を作って行動してゆくことが非常に大事なことではないかと思います。京都にある同志社が、土台をしっかりさせてゆくと同時に、国際的な同志社の分校が、海外にもし出来るとすれば、すばらしいことではないでしょうか。

上田　ひじょうに抽象的な言い方しかできないので残念ですが、やはりいま、同志社のバックボーンは何かということをはっきり確立すること、これが大切じゃないかと思うんです。法人当局は法人当局として、これだというものを明確に打ち出さなければいけないし、また各学校は各学校で、これが同志社だというものを明確に出して、学生、生徒にぶつけていかなければいけないと思います。私学は、いまひじょうな危機にあるわけなんですが、このときに、ユニークな、といいますか、同志社はこれだというもの、同志社の持ち味を出さないといけないときにきているのじゃないかという感じがします。

それと、物を考える場合に、やはり全同志社的な視野で考えていくことが必要じゃないか。大学は大学だけのため、高校は高校だけのため、中学は中学だけのため、といった考え方でやった場合には、ぐあいが悪いのじゃないか。全学的な立場で、一貫教育を進めていくということが大切なんじゃないかと思います。

井上　ありがとうございました。いま上田先生のおっしゃいましたように、新島精神あるいはキリスト教主義教育とは何か、私学同志社は、教学、経営の両面で現状を真摯に見つめ、将来どういう方向をめざすべきか、を検討する委員会を学校法人同志社として組織し、長期計画を立てていただきたいと思います。

亡くなられた秦前理事長が一〇年前の九十周年記念事業の目標に、「創立者の遺訓に基づく精神教育の徹底強化」を第一に挙げておられました。その後実現されているとはいえません。百周年記念事業計画のなかで、新島講座の開設を挙げていますが、ぜひ、これは実現していただきたいと思います。

本日は長時間ありがとうございました。

（一九七五・九・二十九）

新島襄研究参考図書

My Younger Days　同志社校友会
新島先生書簡集（森中　章光編）　同志社校友会
新島先生書簡集―続（森中章光編）　同志社校友会
新島襄書簡集（同志社編）―岩波文庫　岩波書店
新島襄先生（徳富蘇峯著）　同志社出版部
新島襄―人と思想（魚木忠一著）　同志社出版部
新島襄（岡本清一著）　同志社出版部
新島先生と徳富蘇峯（森中章光著）　同志社
同志社九十年小史（同志社社史史料編集所編）　同志社
雑誌「新島研究」　同志社新島研究会
新島襄（和田洋一著）　日本基督教団出版局

※比較的参照しやすいものを掲載